



馬耳東風

古代人も見たであろう「甲斐風土記の丘」の天辺から見下ろす甲府盆地は、南アルプスから鳳凰山の向こうに甲斐駒ヶ岳が、眼を転ずると八ヶ岳から秩父山地へ、さらに大菩薩嶺へと脈を引く要害の地であり、そこからの眺めは実に見事である。郷土の古代を土の中から掘り起こし、歴史を確かめた満足気な表情がほころぶ。石和の青空温泉で発掘の身体を癒したと聞く。中央自動車道が開通し、富士川上流の笛吹川と釜無川流域で建物が随分増えたという。手前山裾を注目の山梨リア実験線が走る。富士山に向かって山々が、雲を抱きながら人間社会を見下ろしている。どの山も名にし負う名山だ。「風土記の丘」は、国の音頭取りで各地に見かけるようになった。遺跡を中心とする野外博物館と公園機能を備えた画期的な取り組みである。弥生文化は、紀元前5世紀頃から3世紀頃までの約800年間大陸や半島文化の影響を受けながら稲作が発達した。古代国家形成に向けて踏み出し、やがて身分差が生じ首長層が力を持ち墳丘墓が出現する。古墳時代の前段階だ。3世紀末から7世紀末までに前方後円墳が各地に造られた。大和王権が倭の統一政権を確立していくなかで、各地の豪族が古墳を建造した。この時代、大陸や半島からの渡来人の関わりは大きい。甲斐風土記の丘の丘陵西端支丘の狐塚古墳から出土した画文帯神獸鏡の年号は、なんと呉の紀年銘「赤烏元年（238）五月廿五日」と倭の卑弥呼の時代だ。やがて記紀にヤマトタケルが登場し、肖像が終戦直後に千円の

兌換券で発行され幻の紙幣と呼ばれた。古事記は倭建命やまとたけるのみこと、日本書紀は日本武尊やまとたけるのみことと記す。

考古学の専門家で過去に数々の古墳の発掘を手がけ、古墳と記紀に見る酒折宮に注目して研究している笛吹市の森 和敏さん（76）に案内して頂いた。ヤマトタケルは言向けしながら東征し、国造くにのみやつこに欺かれて駿河国の野中で火攻めに遭い、火打石で迎え火を打って難を免れた。火打囊ひうちぶくろは出発の途次、伊勢神宮の叔母倭比売命から授かったものだという。東征の帰還時に甲斐国酒折宮に駐輦する。酒折宮は日本武尊を祭神とし、この火打囊を御神体とし宮司も開けることがないという本殿は、神明造高床穀倉式で左右に円柱形の棟持柱が、屋根には千木と堅魚木が、破風には鞭懸むちかけがはめ込まれ伊勢神宮と同じ様式である。また、連歌発祥の地でもある。古墳の発掘に当たっては民間伝承も参考にし、祠や神社との関連性が高いそうだ。副葬品は生活用品が多いとか。甲斐駒は貴重品で発掘した骨を調べると、小型で道産子のようなだと教えて頂いた。風土記の丘の傾斜地では円墳や前方後円墳の水準や角度の技術、さらに方形の延長交点が円形の頂点と一致する高度な土木技術に驚かされる。発掘するとかかなり古い時代の盗掘も多いと聞かされた。丘があり祠がある風景はどこにでも見られる。専門家の目は古代渡来人の移動、豪族の姓や地名あるいは里人の伝承に注目しつつ、土の中に眠っている古代史を追い続ける。グローバルな時代に人類の尽きない探究心は、天と地に向けたロマンを追い求めることだどつくづく思う年頭である。（柏）